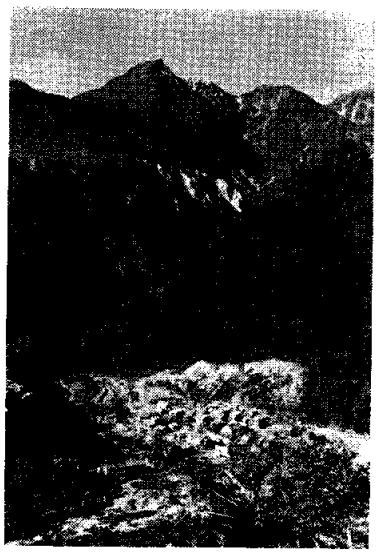
国立公園の利用者と自然保護



（層雲峡）

大田正豁

アメリカやヨーロッパの公園の写真を見ていると、家族連れや老人たちが芝生やベンチで日光浴をしているものがある。夏の海はもちろん、春のスキー場でさえ水着一枚になって肌を焼いている。これが自然に親しみ、余暇を楽しんでいる本来の姿のような気がする。

では、日本のレジャーという言葉に代表される余暇の楽しみ方はどうであろうか。団体で温泉地に出かけ、酒を飲み、家族連れで海水浴場に出かけては雑踏の中で泳ぎまわりクタクタに疲れ若者たちは冬のスキー場に出かけ、寒い中をリフトの長い行列に加わる。レジャーというのは、余暇に休息をとりながら楽しむものではなく、人の多く集まるところへ出かけ、疲労して帰ってくることかと疑いたくなる。このような人が大雪山国立公園にもやってくるのです。

前に、日本野鳥の会々長の中西悟堂氏が雑誌に書いておられたのを思い出します。日本人の自然の親しみ方は、すべて所有欲に直結している。古来からの遊びは、紅葉狩り、サクラ狩り、汐干狩り等々、どれもこれも泥棒することばかり、子供の遊びにしても、セミとり、トンボとり、ここから「誰のものでもないのなら、勝手にとってもよかろう」という日本的な発想が生まれた。「誰のものでもないのなら、自分たちのものでもない。国民共有のものだから、個人が勝手にとることは許されない」という考え方とは反対である。このようなことから、日本人は自然を如何に利用したら良いかということを知らない。ただ単に、自然は略奪すべきものと考える国民なのか、と疑いたくなるのです。

大雪山の赤岳に観光道路という名の車道ができ、人がどっと入ったため、昔は素晴しい高山植物のお花畑だったという第一花苑は名ばかりになってしまったのです。持ち去られたものも多いでしょう。さらに、高山植物のじゅうたんの上に腰をおろし昼食を食べたり、踏み荒したりという無神経さの犠牲になったものも多いのです。また十勝岳の望岳台から白銀荘へ行く車道沿いは、営林署で苦労して植えたアカエゾマツが根こそぎ抜き取られています。多分、車のトランクに投げ込まれ、運び去られたのでしょう。

自然が豊富にある国立公園が設置されている目的は、自然公園法につぎのように述べられています。「すぐれた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進をはかり、もって国民の保健、休養及び教化に資する」。国立公園は利用されねばならない。しかし、そのために自然を破壊してはいけないということなのです。国民が国立公園を利用するための施設としては、宿舎、駐車場をはじめ、車道、歩道などいろいろあるのですが、どこまでが必要な施設で、どこからが自然を破壊してしまうかを見極めるのが、われわれの仕事の一部なのです。これを判断することは、各種の要素が入り込んできて困難なことです。

層雲峡と湧駒別には、昨年ロープウェーが完成しました。できた以上は、この利用と自然保護を両立させねばならないのです。赤岳や他の場所の二の舞いをしないために、層雲峡では大雪営林署、上川町、ロープウェーの会社などが中心になって今年からさらに厳重な指導を行なうことにしています。高山植物を取ることはもちろんお花畑に入って写真を撮ることも禁止され、もし登山道からはずれて附近を歩きまわったりすれば、遠くからスピーカーで「登山道以外は歩かないで下さい」という声が飛んでくるでしょう。これをするには、どこが登山道かをはっきりさせねばなりません。

もちろんいままでの登山道が不備で、一雨降れば道が沢と化すようなところが多かったためですが、大々的に改修する計画があり、今年着工される予定です。これは層雲峡だけでなく、湧駒別においても同様のことが計画されています。昔、大雪山に登った人が、今年登山されたらその厳しい監視にびっくりされ、大雪山もこんなになってしまったかと嘆かれることでしょう。われわれも、エチケットやモラルが行き渡りこのような自衛手段の必要がなくなることを祈っているのです。

（大雪山国立公園管理員）